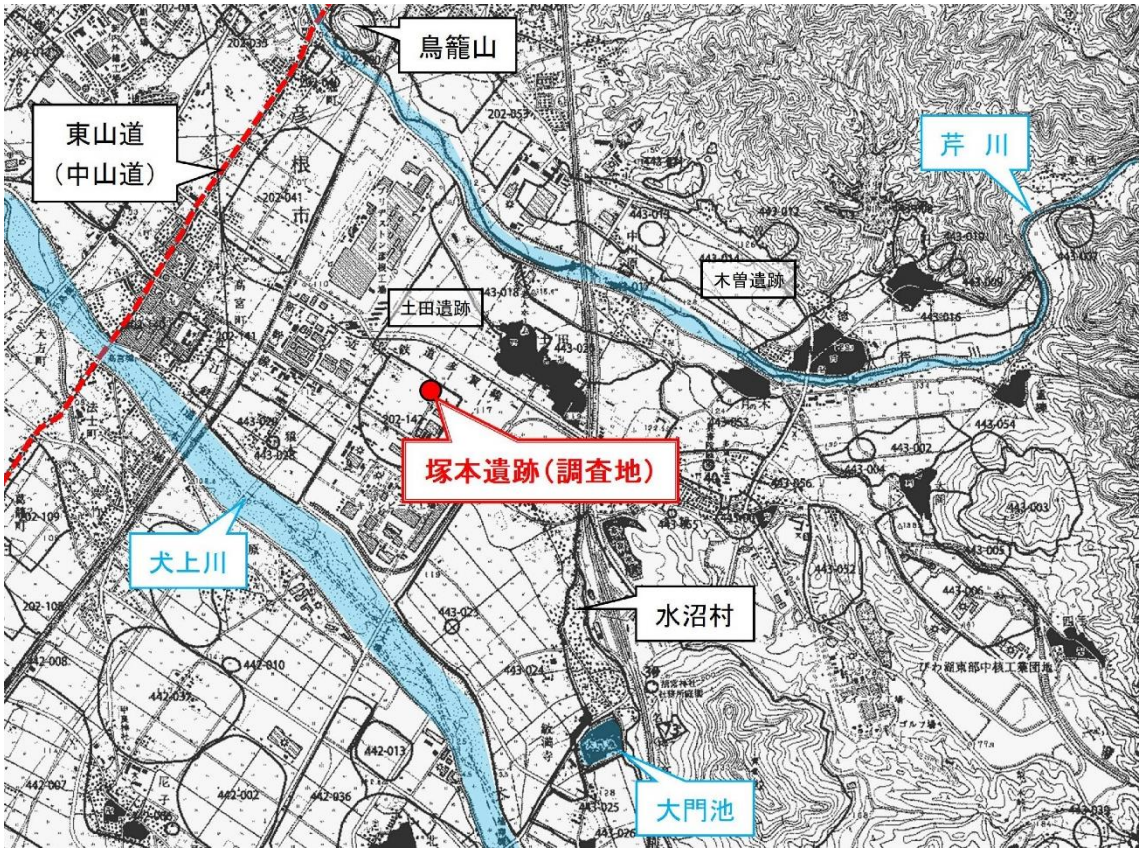
塚本遺跡（第 3 次調査）
—犬上川右岸扇状地の開発—

遺 跡 名：塚本（つかもと）遺跡
所 在 地：滋賀県彦根市高宮町　地先
時　　代：弥生時代終末～古墳時代初頭、飛鳥・奈良時代
調査面積：第 1 次調査：1,500 ㎡
　　第 2 次調査：3,500 ㎡
　　第 3 次調査：4,000 ㎡（今回報告分）
調査期間：第 1 次調査：令和 2 年（2020 年）11 月～令和 3 年（2021 年）3 月
　　第 2 次調査：令和 3 年（2021 年）10 月～令和 4 年（2022 年）3 月
　　第 3 次調査：令和 4 年（2022 年）　4 月～令和 4 年（2022 年）8 月
調査原因：資材置き場造成工事
調査機関：彦根市
報告者名：林　昭男



遺跡の位置（1/25,000）

１．調査の経緯

塚本遺跡は、犬上川右岸扇状地の扇央部、彦根市東部の多賀町との市町境付近に位置する遺跡です。これまで、本発掘調査が実施されたことはありません。

令和元年度に、民間の資材置き場造成工事に伴い試掘調査を実施したところ、遺構・遺物が確認されたため、記録保存を目的とした本発掘調査を実施しました。調査は、調査区を5地区に分けて3ヶ年で実施しました。令和2年度に第1次調査（第1調査区：約1,500㎡）、令和3年度に第2次調査（第2・3調査区：約3,500㎡）、令和4年度に第3次調査（第4・5調査区：約4,000㎡）を実施しました。本稿は、第3次調査の調査成果を中心に報告しますが、必要に応じて第1・2次調査成果を補完して報告します。本報告は令和5年2月末時点での調査成果についての中間報告となります。今後、整理調査の進展に伴い、遺構の時期や評価について、一部変更・修正される可能性がありますことをご了承下さい。

２．遺跡の概要

彦根市域の平野は、芹川、犬上川、宇曽川、愛知川の四河川による堆積で形成されています。その中でも、犬上川、愛知川の堆積作用はきわめて大きく、大規模な扇状地を形成しています。扇状地は、主に砂礫層で構成されているため、川の水は地下にしみこんで伏流水となり、地表の流路は涸れ水となっていることが多いです。特に、塚本遺跡が位置する扇状地扇央部は、地下水位が極めて低いため、飲料水や灌漑用水の確保が難しく、一般的に開発が困難な地域と言えます。

塚本遺跡の周囲の状況ですが、北東部に芹川、南西部に犬上川が流れており、北西約1.5㎞には、古代幹線道路である東山道と鳥籠駅比定地の鳥籠山（大堀山）が位置します。南東約1.5㎞には、所謂初期荘園（古代前期荘園）と呼ばれる東大寺領水沼荘（水沼村）の比定地が位置します。これは、東大寺正倉院に残されていた近江国水沼村墾田地図に描かれたもので、その比定地が現在の多賀町敏満寺周辺と考えられています。その絵図に記された天平勝宝3（751）年の記載により、当該期には東大寺領の荘園として開発されていたと考えられています。塚本遺跡の市町境を挟んだ北東隣接地には多賀町土田遺跡がひろがっています。これまで、多賀町教育委員会などにより複数回の発掘調査が実施されておりますが、その調査成果によると、縄文時代晩期（B.C1000）の墓跡、弥生時代後期の直線溝、弥生時代終末～古墳時代初頭の竪穴建物などが確認されています。また、平安時代の9世紀中葉の遺構・遺物が多数検出され、その中には円面硯や石帯など官衙施設に関係する遺物も出土しています。少し離れますが芹川の右岸に位置する木曽遺跡では、弥生時代終末～古墳時代初頭の竪穴建物が複数棟検出されており、その内の1棟から鏡が出土しています。また、6世紀後半～7世紀前半の大壁建物が複数棟確認されており、その建物形態より渡来人との関わりが推定されています。同時期の灌漑用水路と考えられる溝も確認されています。

上記のような歴史的環境を有する塚本遺跡ですが、今回の1～3次調査では、扇状地という開発が困難な地域で、開発に取り組んだ先人たちの努力の一端が見えてきました。

３．調査成果の概要

現在までのところ、1～3 次調査全体で概ね 4 時期（①弥生時代終末以前、②弥生時代終末～古墳時代初頭、③飛鳥・奈良時代、④飛鳥・奈良時代以降）の遺構を確認していますが、中心となるのは弥生時代終末～古墳時代初頭と飛鳥・奈良時代の遺構です。以下に、時系列で主な遺構・遺物の概要について記述します。

（１）弥生時代終末～古墳時代初頭の遺構

① 竪穴建物

弥生時代終末～古墳時代初頭の竪穴建物が 5 棟検出されています。比較的残りの良かった第 4 調査区の竪穴建物【SH14】と第 5 調査区の竪穴建物【SH2・SH5】を見ると、平面形が一辺約 4～7mの隅丸方形で、内部の状況は、竪穴壁面沿いに壁際溝（壁溝）が廻っており、主柱穴と方形の土坑も確認されています。また、中央付近の床面は堅く焼き締められており、煮炊きなどを行った炉があったと考えられます。これらの竪穴建物の規模・形態は、第 1・2 次調査と隣接地の土田遺跡における同時期の竪穴建物と同様のものであり、当該期周辺地域で通有のものであったと思われます。また、第 4 調査区の竪穴建物【SH14】では、竪穴に沿う形で細い溝（外周溝）が確認されています。

出土遺物は、古式土師器が出土しています。

② 溝

第 4 調査区で確認された溝【SD9】は、幅 0.7～1.4m、深さ 0.4mの直線状の溝です。水が流れた痕跡は乏しく、溝の底部から浮いた状態で完形の壺などが複数点出土している点が特徴的です。

（２）飛鳥・奈良時代の遺構

① 旧河道と溝（灌漑用水路）

第 4 調査区東方で、飛鳥・奈良時代の旧河道【NR16】とそこから導水する複数の溝を確認しました。溝【SD1・SD2】の規模・形態・特徴は第 1・2 次調査を含めると以下のとおりです

【SD1】：長さ約 100m以上、幅約 1.8～2.5m、深さ約 0.8～1.3m

【SD2】：長さ約 100m以上、幅約 0.7～1.5m、深さ約 0.3～0.4m

【SD1・SD2】は、100m以上並行して伸びる直線溝で、いずれの溝も、下層には砂礫が堆積していることより、旧河道【NR16】から導水した多量の水が流れていたと想定され、その用途は灌漑用水路と推定しています。また、底部高が東方から西方に下がっていくことより、同方向に水が流れていたと考えられます。

出土遺物は、縄文土器や石器、古式土師器や土師器、須恵器です。須恵器は 7 世紀後半から 8 世紀前半のものであるため、これらの溝は概ね 7 世紀後半から 8 世紀前半には機能していたものと考えられます。

② 竪穴建物

第 4 調査区で、2 棟の竪穴建物【SH12・SH13】を確認しました。平面形が一辺約 5～7mの隅丸方形で、竪穴壁面沿いに壁際溝（壁溝）が廻って

おり、主柱穴に土坑、カマドが確認されています。両棟とも竪穴に沿う形で細い溝（外周溝）が確認されています。

③ 掘立柱建物

第 4 調査区で、3 棟の掘立柱建物【SB1～SB3】を確認しました。掘立柱建物【SB3】は総柱建物で高床倉庫と推定しています。

（３）飛鳥・奈良時代以降の遺構

① 畦畔遺構

第 5 調査区で畦畔遺構【SX8】を確認しました。幅約 1m、東に約 33 度傾いた東西方向に伸びる畦畔です。第 1・2 次調査で同様の畦畔遺構を確認しております。犬上郡における条里地割が東に 31～34 度傾いた方位の地割群であるため、それに方位的に合致する畦畔と言うことができます。出土遺物が確認されていないため、他遺構との切り合い関係により、飛鳥・奈良時代以降という以外、詳細な時期は不明と言わざるを得ません。

４．まとめ

今回、3 次にわたる塚本遺跡の調査によって、開発困難地域である犬上川扇状地の開発の様相の一端が見えてきました。弥生時代終末～古墳時代初頭の建物遺構、飛鳥・奈良時代の旧河道とそこから導水される直線溝と建物遺構、詳細な時期は不明ながら犬上郡条里地割の方位に沿った畦畔遺構の検出は、当該地の開発動向と実態を検討する上で、重要な調査成果を得たと言えるでしょう。ここでは、特に飛鳥・奈良時代の旧河道と直線溝について、若干の検討を加えることでまとめに代えたいと思います。

河岸段丘面や扇状地における古代の耕地開発には、主に二つの方法がありました。

一つ目は、長距離水路による灌漑です。代表的な事例としては、大阪府の古市大溝や京都府の松室遺跡、県内においては、芹川右岸の木曽遺跡や犬上川左岸の下ノ郷遺跡などの事例を挙げることができます。松室遺跡はやや時代を遡るようですが、他の事例は、7 世紀～8 世紀前半頃に開削されたと考えられています。

二つ目は、溜池による灌漑です。代表的な事例としては、大阪府の狭山池、県内では八日市の布施溜や吉住池などの事例を挙げることができます。狭山池は 7 世紀頃、県内の 2 事例は 8 世紀頃と考えられています。

それでは、塚本遺跡が位置する犬上川右岸は、古代にどのような耕地開発が行われたのでしょうか。まず、史料となるのは前述した近江国水沼村墾田地図です。これは、現在の犬上川右岸多賀町敏満寺周辺を比定地とする東大寺領水沼荘（水沼村）を描いたものです。その記載より勝宝 3 年（751）年の状況が描かれているということが理解されます。そこには、溜池である水沼池（現在の大門池）と耕地を横断する長距離水路（現在の二ノ井）が描かれています。すなわち、8 世紀中葉の段階（前述絵図の描かれた時期）には、少なくとも水沼荘（水沼村）域では、溜池（水沼池）と犬上川から直接取水する長距離水路の二

つの方法のどちらも用いた耕地開発が行われていたことが確認できるのです。ただ、絵図のみでは、この耕地開発がいつ頃から行われてきたのか、溜池（水沼池）と長距離水路の前後関係の有無、また水沼荘（村）域外の犬上川右岸の耕地開発の状況など解決しなければならない課題も多く残されています。

これまで犬上川右岸では、これらの課題を補う発掘調査の事例にあまり恵まれていませんでした。今回、水沼荘（水沼村）域外の塚本遺跡の調査により、長距離水路（第 4 調査区 SD1・SD2 等）が検出され、その時期が絵図を遡る段階、少なくとも 7 世紀後半～8 世紀前半には開削されている状況が確認されました。また、その長距離水路は、旧河道から導水され、大小２本の並行する直線溝で構成されること、その 2 本の直線溝が等間隔で敷設された状況が確認され、当該地の耕地利用の具体的な姿を検討する好材料を得ることができました。今回の調査から、犬上川右岸扇状地が絵図の描かれた時期以前から開発されていた状況が浮かびあがってきたと言えるでしょう。

５．今後の課題

今回の一連の調査（第 1～3 次調査）は、長らく停滞気味であった犬上川右岸扇状地の耕地開発の実態を検討していく上で、大きな調査成果を得たと言えます。今後、整理調査を通じて、より具体的な開発の変遷や耕地開発の実態を検討していく必要があります。また、耕地開発の実態が明らかになるにつれて、それらの大土木工事を行った開発主体の問題もでてくるでしょう。長距離水路が掘削される地域は、渡来系氏族の分布の濃い地域とも言われています。塚本遺跡が位置する犬上川扇状地は、画師として知られる簀秦氏が開発にあたったものと推定され、近隣の芹川右岸の木曽遺跡では、渡来系氏族との関わりが推定される大壁建物が検出されています。これらの渡来系氏族と耕地開発との関わりも今後検討していかなければならない課題と言えます。今後も、地道な調査・研究を進めていきたいと思います。

最後に、上述したように塚本遺跡が位置する扇状地扇央部は、地下水位が低いため、飲料水や灌漑用水の確保が難しく、一般的に開発が困難な地域と言えます。そのような、開発が困難な地域にも関わらず、現在犬上川流域の扇状地一帯は広大な水田が広がっています。これらの豊かな水田が広がる美しい景観は、開発困難地域に果敢に挑み、地道に水を引き、開墾を続けた先人たちの努力の賜物であるということを今回の調査を通じて強く感じました。

≪参考文献≫

大阪府立狭山池博物館　2011『古代狭山池と台地開発のはじまり』
佐藤泰弘　1996「4 近江 a 近江国水沼村墾田地図」『日本古代荘園絵図』
(財)滋賀県文化財保護協会　1996『いにしえの渡りびと　近江の渡来文化』
神保忠宏・畑中英二　1997「東大寺水沼荘の開発」『紀要』第 10 号　財団法人滋賀県文化財保護協会
彦根市　1960『彦根市史』上冊

図１　調査地区割図・第４調査区主要遺構概略図

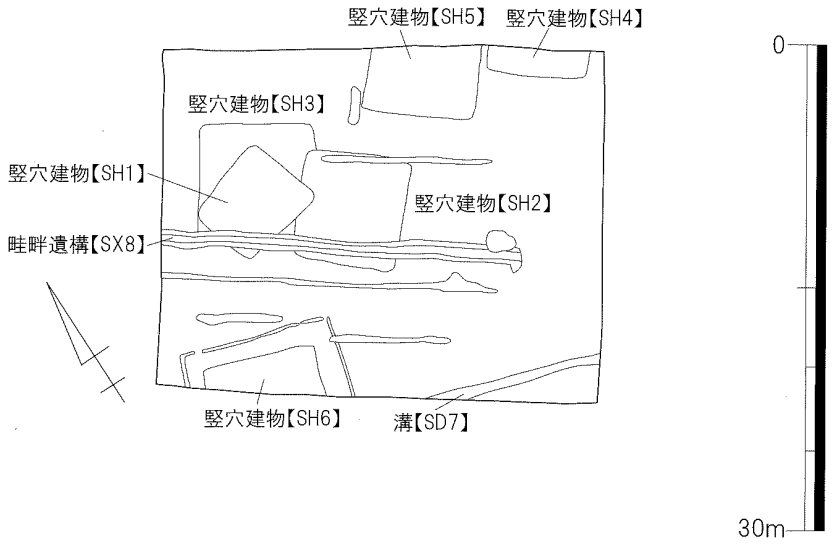


図２　第５調査区主要遺構概略図

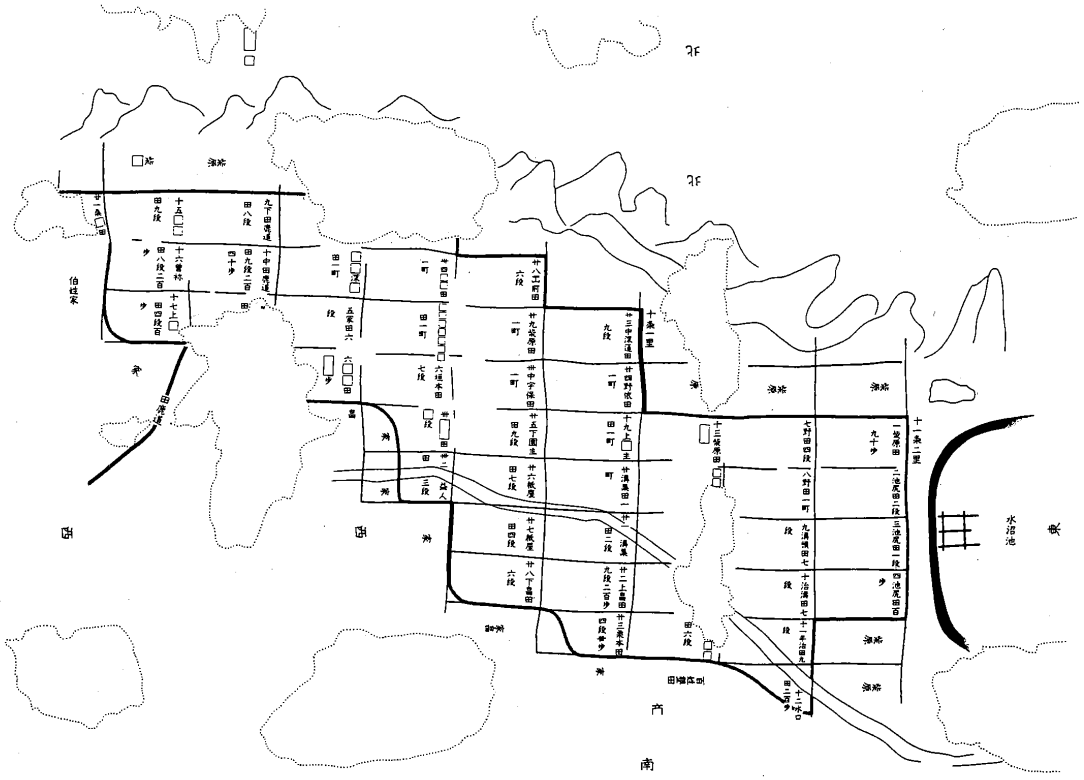


図３　水沼村墾田地図　トレース図（佐藤 1996 より転載）

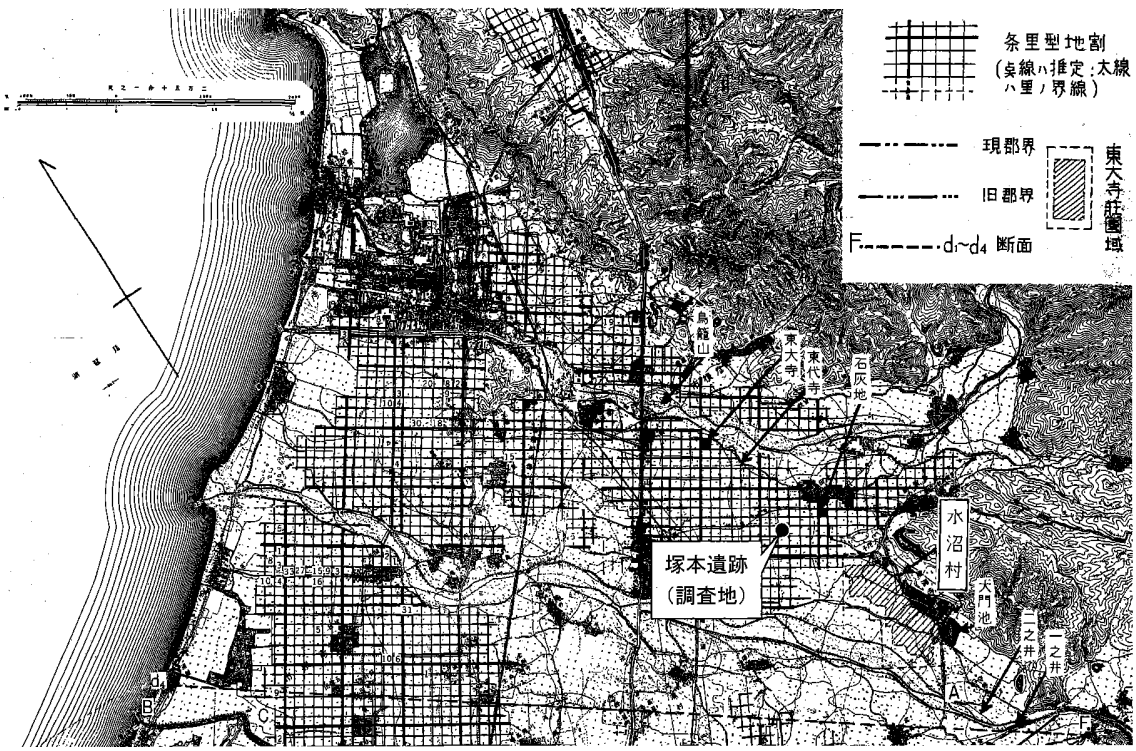


図４　犬上川扇状地の条理地割と塚本遺跡（『彦根市史』（上冊）の図に加筆）

写真１　第４調査区全景（西から）

写真２　第４調査区の竪穴建物【ＳＨ１４】（北東から）

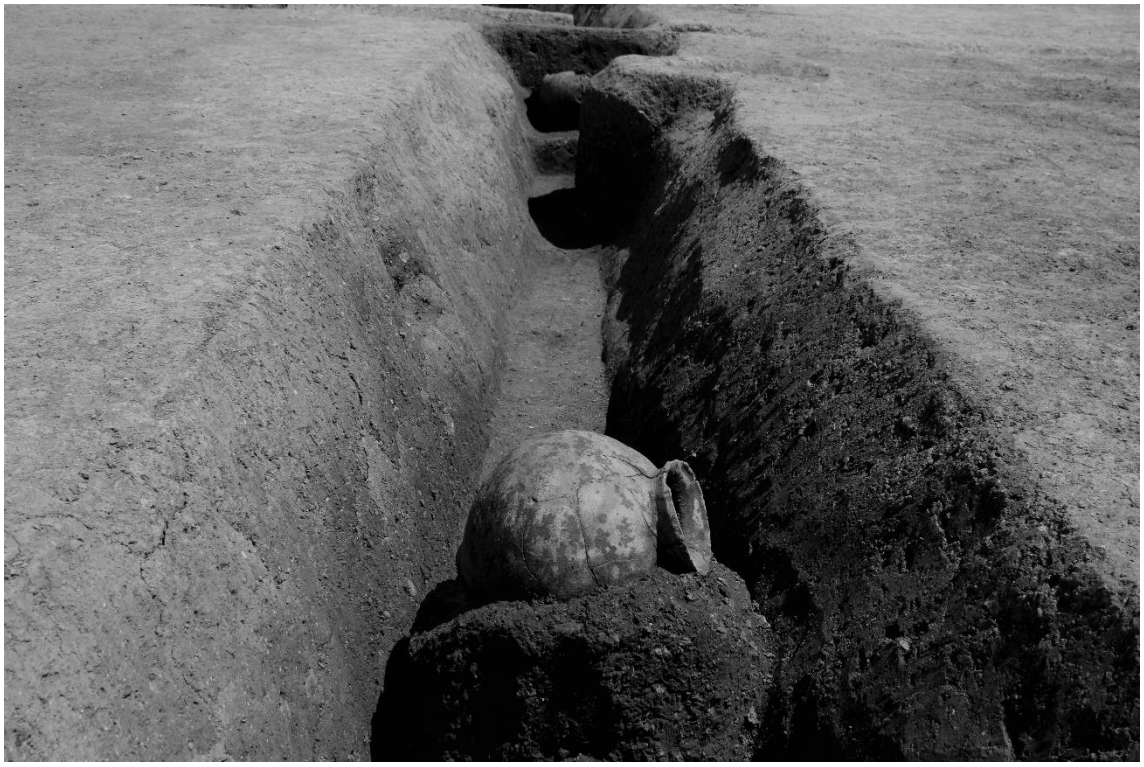


写真３　第４調査区の溝【ＳＤ９】（北西から）

写真４　第４調査区全の旧河道【ＮＲ１６】（北西から）

写真５　第１調査区の直線溝【ＳＤ１・ＳＤ２】（第４調査区から）

写真６　第４調査区の掘立柱建物【ＳＢ１】（南東から）

写真７　第４調査区の竪穴建物【ＳＨ１２・ＳＨ１３】（南から）

写真８　第４調査区の竪穴建物【ＳＨ１３】（南から）

写真９　竪穴建物【ＳＨ１３】のカマド（南から）